

# ロバート・ヴェンチューリとジェイン・ジェイコブズの生涯を通じて見る都市の “多様性”

## A STUDY ON URBAN “COMPLEXITY” AND “DIVERSITY” THROUGH LIFE OF ROBERT VENTURI AND JANE JACOBS

建築デザイン分野 打田小春

建築家のロバート・ヴェンチューリと、建築家や計画家に反感を持っていたジャーナリストのジェイン・ジェイコブズは本来対立する立場であるが、1960~1970年頃両者共「都市の多様性」の重要性を論じている。現在意味が曖昧になっているこの言葉について、両者の生涯を通じて各々の「都市の多様性」の概念を明らかにし、共通の概念を見ることで、「多様な要素」の間に「差・相違」が存在することによって「連想作用」が引き起こされ、都市は魅力的になることがわかった。

Properly Robert Venturi, an architect and Jane Jacobs, a journalist who opposed architects and urban planners may be opposed to each other but both insisted on the importance of “city diversity” around 1960 to 1970. And the sense of the word is becoming ambiguous now. I looked both thought of “city diversity” through their lives and identified something in common. Then it is revealed that a city becomes fascinating in consequence of association being caused by the differences between various elements in the city.

### 1. はじめに

#### 1.1 研究の背景

一般に、機能主義を命題とした近代主義建築はそれ以前の様式的な建築から決別を図り、20世紀中期において世界の至る所でモダニズム建築を生み出してきた。しかし、機能主義の形骸化に対する批判、歴史性や地域性の放棄に対する反省から、モダニズムを乗り越えようとする動きが1960年代から1970年代に生まれる。以降、都市計画においてはそれまでの二者択一という考えではなく、両者共存の考えやブリコラージュの概念が広まり、建築や都市を論じる言葉も徐々に変化し、「多様性」や「象徴性」、「大衆性」などの言葉が見られるようになる。

近代主義に相反する潮流として1961年、ジェイン・ジェイコブズが『アメリカ大都市の死と生』で近代都市計画を真っ向から批判し、その本は人々の都市に対する意識を覆したと言われている。1965年にはクリストファー・アレグザンダーがジェイコブズの考えと非常に近接した思想を論理的に説明した『都市はツリーではない』を出版する。そして1966年、ロバート・ヴェンチューリは建築における歴史性や多様性を見直した『建築の多様性と対立性』を出版した。その本は「ル・コルビジエ著『建築を

めざして』以降、建築について書かれた著作のうち最も重要な本<sup>1</sup>とされ、建築分野において非常に重要なものと位置づけられている。

その後も上記のような書物に続き、建築・都市デザインに関する書籍が何冊も出版され、現在、「多様性」という言葉の意味は多義的で曖昧になっている。

#### 1.2 研究の目的

本研究では、モダニズム建築家のもとで建築設計を学び、ポストモダニズムの建築家として非常に有名なロバート・ヴェンチューリとジャーナリストとして建築家を批判したジェイン・ジェイコブズが、対立する立場でありながらほぼ同時期に「都市の多様性」の重要性を論じたことに注目する。両者の生涯を通じて、通年的な視点で二人の人物を捉えると同時に、異なる人生の流れの中でそれぞれが重要であると考えた「都市の多様性」について明らかにし、その共通部分を示す。建築・都市の分野で非常に重要である二人の「都市の多様性」の共通部分は、現在意味が広がってしまっている「都市の多様性」の最も重要な部分であると言え、それを示すことで、「都市の多様性」の真髄を明らかにすることができ

<sup>1</sup> 『建築の多様性と対立性』ロバート・ヴェンチューリ著、伊藤公文訳、鹿島出版会1983 ヴィンセント・スカリーによる紹介より引用。P. 12

ると考えられる。

### 1.3 本研究の位置づけ及び手法

ロバート・ヴェンチューリとジェイン・ジェイコブズはともに建築、都市の分野で非常に有名であるが、彼らの思想を通年的な視点で論じているものは少なく、ヴェンチューリに関しては日本語で出版されているものは見当たらない。そこで本研究では、ロバート・ヴェンチューリの生涯に関しては日本において訳本のない『Out of ordinary : Robert Venturi, Denise Scott Brown and associates : architecture, urbanism, design』<sup>2</sup>を扱う。また、両者はともに1960~1970年頃の思想が非常に有名であるが、それ以降の1980年頃以降における彼らの思想を扱ったものは少ない。本研究では上述の書籍『Out of ordinary : Robert Venturi, Denise Scott Brown and associates : architecture, urbanism, design』からヴェンチューリの後期(1978~)における作品を通じてその時期における彼の思想を見る。また、ジェイン・ジェイコブズの著作で邦訳のない、『THE QUESTION OF SEPARATISM』(1981)を扱い、現在日本で公にされていない彼女の思想を明らかにする。また、ヴェンチューリとジェイコブズ二人の「都市の多様性」に関する思想を同時に比較している論は非常に少なく、妥当性のあるものは見当たらない。

## 2. ロバート・ヴェンチューリ

### 2.1 ロバート・ヴェンチューリの年譜

#### (1) 厳格な教育と自由な大学における人格形成 1925(0歳)~1950(25歳)

1925年、ロバート・ヴェンチューリはフィラデルフィアの大地の建築好きの家庭に生まれる。幼少期、落ち着きがなくなるさい子どもであったため、厳格な教育のエピスコパルアカデミーに入学し、そこで学習方法を身につける。1944年、伸びやかな校風のプリンストン大学に入学し、そこで社会学史、美術学史、古典的芸術装飾様式などを複合的に学び、建築史を理解する。ここで彼は独自の建築史の見方の基礎を作ったと考えられる。

#### (2) モダニズム建築に苦しむ 1950(25歳)~1960(35歳)

大学院を首席で卒業し、モダニズム建築家の事務所を転々とし、1954年ローマに留学する。そこで初期のキリスト教建築やバロック様式、ルネサンス様式の建物に感動する。この時彼は「多様性と対立性を備えた」建築、都市を間近で見て、その「多様性と対立性」の重要さに気付いたと考えられる。この

経験は後の著作『建築の多様性と対立性』を含め、彼の人生に大きく影響を与えていると考えられる。

帰国しルイス・カーンのもとで働いた後、1958年ペンシルバニア大学で教えながら、小さな協同事務所を始める。事務所での仕事をとりたいたと悩む傍ら、建築論の講義を頼まれ、やむを得ず引き受ける。その講義資料を集めたものが後に『建築の多様性と対立性』として出版されることになる。

#### (3) モダニズム建築を乗り越えるものを見いだす 1960(25歳)~1969(44歳)

1960年、デニス・スコット・ブラウンと出会う。仕事が思うように行かず悩んでいた彼は、彼女の考えに大いに影響を受ける。1964年デニスにラスベガスへの旅行に誘われ、そこで建築の象徴によって連想作用とコミュニケーションが生まれている街の在り方に驚き、感動する。そこで彼はモダニズム建築を乗り越えるものを見だし、それ以降設計の仕事が徐々に増えて行く。1966年に『建築の多様性と対立性』、1972年には『ラスベガス』が出版される。

#### (4) ポストモダニズムの建築家として 1969(44歳) ~2014 現在(88歳)

1969年、デニスが事務所に加わる。1970年以降仕事は劇的に増えていく。ロンドンのナショナルギャラリー・セインズベリー館など大プロジェクトも多数手掛け、様々な賞を得て、現在彼はポストモダニズムの建築家としての地位を確立しているといえる。

全体を通して見ると、彼は生涯建築家として建築設計に携わっていることがわかる。ロバート・ヴェンチューリはモダニズム建築に苦しみ、それを乗り越えるものを見いだした建築家であると言える。

### 2.2 『建築の多様性と対立性』と『ラスベガス』にみる「多様性」の概念

ヴェンチューリは16世紀のイタリアや古典時代のヘレニズム期のような、マニエリスムの時代から現代にいたるまで連綿と続く流れの中に「多様な」建築への欲求があると考えた。そして建築における「多様性」を不十分にしか認めず、「初源的なもの」を理想とした近代建築家を批判した。

そしてそのような近代主義の建築家が排除してきた様々な要素、つまり互いに対立するものを内に含む様々な要素、を一貫して「多様性と対立性」という言葉で表す。以下に彼の思想を分析してわかったことを述べる。建築の内に相矛盾する様々な要素(「多様性と対立性」)が存在することにより、その建築には「曖昧さ」が生じる。そしてその曖昧さを知覚することによって、見る人に「連想作用」が引き起こされる。そしてその「実際のイメージ」と「想像されたイメージ」の知覚のずれにより、そこには

<sup>2</sup> David B. Brownlee, David G. De Long, and Kathryn B. Hiesinger 著、PHILADELPHIA MUSEUM OF ART IN ASSOCIATION WITH YALE UNIVERSITY PRESS 2001年

「緊張」が生まれ、建築は魅力的なものになる。以上のような現象が起こることを彼は重要であると考えている。そしてそれは建築だけでなく、都市にもあてはまることを述べている。そしてラスベガスについて、ローマが「高尚な建築」、つまり「多様性と対立性」を兼ね備えた建築によって「連想作用」を引き起こし都市に多様性をもたらしたのに対し、ラスベガスでは「象徴」、例えば、道路沿いの折衷主義的デザインの大きな看板によって「連想作用」を引き起こし都市に多様性をもたらしている点が新しく、現代の建築家はまねすべきであると考えている。

### 2.3 後期作品にみるロバート・ヴェンチュエリの思想

1970年以降、建築プロジェクトの仕事が増えて行く一方でヴェンチュエリは1978年から意欲的に芸術装飾品の仕事も手掛ける。彼は家具や食器においては、1960年以降に彼が否定してきたような「単純化」や「純粋化」の概念を持ち込み歴史的なビルや建物をもとにしてそれらを「抽象化」し、自身が歴史性や伝統性を重んじていないことを述べる。芸術装飾品に対して建築プロジェクトと同等に力を注ぎ、自身が伝統性を重んじていないことを強調し、「モダニスト」であることにこだわりを見せる。



図1 Village Tea and Coffee Service for Swid Powell, 1985-86  
『Out of ordinary : Robert Venturi, Denise Scott Brown and associates : architecture, urbanism, design』 p.222

## 3. ジェイン・ジェイコブズ

### 3.1 ジェイン・ジェイコブズの年譜

#### (1) 生い立ち、両親の愛ある教育に恵まれて 1916(0歳)～1934(18歳)

1916年、ジェイン・ジェイコブズはスクラントンで生まれる。彼女の家庭は、お互いが自由な考え方を受け入れるという寛容さを大切にしていた。この家庭の考え、両親の教育した思想は後に彼女が「多様性」を重要視し、「小さなもの」の存在を主張することにつながっていると考えられる。両親の教えのもと、彼女は少女時代から正直で独立心があり、様々なことに興味を持っていた。初等学校の頃から物を書く才能を発揮し、11歳で彼女の詩が新聞のコラムに刊行される。そして1928年、ニューヨークに旅行する機会に恵まれる。「ジャズと狂乱の1920年代」にあったニューヨークで大都市の魅力に触れる。1933年スクラントンの中央高等学校を卒業し、略記

法を学んだ後、すぐに就職する。

#### (2) 記者としての開花と大学での興味の深化 1934(18歳)～1947(31歳)

1934年、ジェインは記者としてキャリアを求めてニューヨークに出る。そこで職探しをしながら様々な町を歩き回る。1938年、彼女は自分の興味を深めるために物書きの仕事の続けながら大学の講義をとり、地質学、化学、発生学、動物学、法学、政治科学、経済学を学ぶ。1943年、合衆国政府戦時情報局で働き始め、故郷スクラントンの悲惨な状況についての記事は、大きな反響を呼ぶ。他の記事も発表し、工場の設立を政府に訴える。様々な努力が功をなし、新しい工場が開設され始めることとなる。この時から、自分の考えを実行に移し、人々を動かす書き手になっていく。また、仕事を通じて以前から興味であった建築分野のことについて学ぶ。

#### (3) 都市の多様性とそれを破壊するものに気付く 1947(31歳)～1956(40歳)

1947年ハドソン通りに引っ越しそこで魅力的な街路を観察し、何が都市に魅力を与えているのかを考察する。1952年からは、アーキテクチュラルフォーラムの雑誌社で働く。1954年、都市計画家に誘われて訪れた町では、政府が資金をつぎ込んだにもかかわらず、広範囲にわたる破壊が貴重な社会的ネットワークを断絶しているのを目の当たりにし、それを誇らしげに見せる都市計画家に反感を持つ。そして都市政府にその状況に注意をむけさせるための運動に関わる。この時期にジェインは都市の多様性の魅力に気付くとともに、それを破壊するものにも気付く、その破壊のもととなっている近代建築家の思想に大きな反感を持つ。

#### (4) 本の執筆と都市の多様性破壊者との闘い 1956(40歳)～2006(89歳)

1956年ジェインはハーバード大学における講演で現在の都市計画家の間違った方向への努力を攻撃する。彼女のまっすぐな語りは聴衆を動かし、『アメリカ大都市の死と生』の執筆が決まる。執筆期間中も町のコミュニティリーダーとして都市破壊者と闘い続ける。そして1961年に人々の都市に対する意識を覆した『アメリカ大都市の死と生』を出版し、大反響を呼ぶ。以後もアマチュアとして都市破壊者と闘い続け、1968年ベトナム戦争に反対してトロントに移り住む。非暴力主義の講義者として投獄までされる。トロントに移ってから執筆を続けながら高速道路建設計画を阻止する闘いに加わる。2006年、89歳でトロントで死去する。

小さい頃から独立心が強く、様々なことに興味を持っていたジェインは、愛ある家庭に恵まれて、ま

っすぐに育つ。小さい頃から物を書く才能を発揮し、生涯ジャーナリストでありながら、都市の多様性のために建築家や画家を批判し、闘い続けた。

### 3.2 ジェイン・ジェイコブズにみる都市の多様性の概念

#### (1) 都市の魅力とその条件

都市をかたちづくる際、真っ白の状態から建築家や画家が思うものを好きに作り上げるのではなく、そこに住む人々や街路を観察しその町が持つ力を探して、それを利用して「驚き」や「変化」を生み出すことが重要であるとジェイコブズは考えていたことがわかる。

そしてジェイコブズは都市をそのように魅力的なものにするために必要な4つの条件を述べている。

条件1:「混合一次用途の必要性」

条件2:「小さな街区の必要性」

条件3:「古い建物の必要性」

条件4:「密集の必要性」

これらの条件は「たくさんの量、要素がある」ことを必要とする性質を持つ条件1と条件4、「差、違いが存在する」ことを必要とする性質を持つ条件2と条件3に分けられると考えられる。

#### (2) 高密度、多種類

ジェイコブズは職業電話帳を例に出し、それが都市についての唯一最大の事実、「都市はすさまじい数の部分で構成されているということ、そしてその部分がすさまじく多様だ」<sup>3</sup>ということを示す。そして膨大な数が存在すること、その一つ一つがそれぞれ個性を持っておりすさまじく多様であることこそが大都市にとっての天性であることを述べる。条件1「混合一次用途の必要性」で都市に主要な用途が二つ以上あること、できれば三つ以上が望ましい、として「機能の多さ」の必要性を述べ、条件4「密集の必要性」では都市に十分な密度で人がいること、「高密度」の必要性を述べている。以上のことをまとめると、ジェイコブズは都市に「多様な種類の要素が数多くあること」、つまり「たくさんの量、要素がある」ことが「都市の多様性」を生み出すための必要条件であることを示している。

#### (3) 差、相違

ジェイコブズは都市において、例えば不規則な高低差や舗装や標識の種類の多様さなど「多様な種類」のあいだの小さな「差」を重要視している。条件3「古い建物の必要性」で、「古い建物」と「新しい建物」を混在させることで、都市に存在する建築のコストに「差」が生まれ、建て替えや改修によって、

ある世代にとって効率的な利用をするための場所であった空間は、別の世代にとって豪華な空間に変わったり、或る世紀のごく平凡な建物は別の世紀で便利な変わった建物となったりすることを述べ、建築コストの「差」が、都市に「変化」と「循環」がもたらすことを述べている。また条件2「小さな街区の必要性」では、街路上のコントラスト（相違）が歩行者のイメージネーション、つまり連想作用を引き起こすことをジェイコブズは述べている。

以上のことにより、ジェイコブズは各要素の「差・相違」によって都市に「変化」と「循環」、「連想作用」が引き起こされると考えたといえる。

#### (4) まとめ

ジェイコブズは「都市の多様性」を生み出すためには4つの条件が必要であると考えた。そして本節においてその条件は「たくさんの量、要素がある」ことを必要とする性質を持つ条件と各要素の間に「差、相違が存在する」ことを必要とする性質を持つ条件の二つに分けられることを示した。そして都市に「たくさんの量、要素がある」ことは絶対的な必要条件で、そのたくさんある要素同士に「差」、「相違」が存在することによって都市において「変化」、「循環」、「連想作用」が引き起こされ、その「変化」、「循環」、「連想作用」のために都市は面白いものになると考えたことがわかった。

### 3.3 『THE QUESTION OF SEPARATISM』にみるジェイン・ジェイコブズの思想

#### (1) 概要

『THE QUESTION OF SEPARATISM』は、カナダのケベック分離独立運動を題材として小さなもの（ケベック）が国家主義という大きなものに強引に同質化されることに対する異議申し立てとしてケベックの分離独立を支持する議論を展開したものである。

#### (2) 国家の大きさと経済の発展

ジェイコブズは、国家の大きさに関わらず、産業が分岐し、多様化することで経済は多彩となり、国家として発展できるということを示す。そして一次資源の輸出に頼り、産業の多様化に無関心であったためにカナダが経済的に発展できなかったことを述べる。彼女はここにおいても「多様化」の重要性を主張している。

#### (3) サイズの逆説

ジェイコブズは経済における企業の分離独立と、アメーバの分裂を例にあげ、「分裂」には「崩壊」と「誕生」の二つの意味があり、それは自身をより強いものにするチャンスであること、そして分裂における突然変異は多様な要素を生み出すために極めて

<sup>3</sup> 『アメリカ大都市の死と生』ジェイン ジェイコブズ 著、山形浩生訳、鹿島出版会 2010p. 166 より引用。

必要であることを述べている。そして、統合してサイズを大きくすることは一見すると良くなるように思えるが、それは多様性を殺すことであり、すべきではないことを主張している。

#### (4) 国同士を連結するもの

ここでジェイコブズは国家同士の関係性は非常に難しく、国家間で通貨を別にすることの重要性を主張する。別の通貨を使うことで、貿易の際、為替レートによる差額のために一方の国に差額分の利益が生まれる。そしてその差額の利益によって次の貿易が起りやすくなり、現状で小さい国が押し上げられると同時に貿易が活発になることで輸出の多様化が起こることを述べている。

#### (5) ケベックの独立に関するジェイコブズの考え、姿勢

本の最後に、彼女達の世代の人々によって作られた、息苦しく、制御できない程に制度化され不自由になってしまった現在の乱雑な世界を後世に残すことに絶望する一方で、ケベックのために、中央主権化していくことと闘うことは後世に対する見苦しくない贈り物とすることができることを述べ、ケベックと他の州との関係性を作ることができれば、最上級に誇ることができるとして、自身の闘う意志と後世に対する姿勢を述べて終わっている。

#### (6) まとめ

(2)「国家の大きさと経済の発展」において「発展」と「大きさ」は関係ないことを述べ、(3)「サイズの逆説」ではジェイコブズは「分離すること」、「小さくなること」で生じる「突然変異」、「変化」の重要性を、(4)「国同士を連結するもの」では通貨を別にすることによって州同士、国同士のあいだで貿易、つまり分離によって生じる「差」により「循環」が起こることの利点を述べていることがわかった。ケベック州の分離独立問題についての彼女の考えを見ることにより、この時期についてもジェイコブズは都市、社会において「小さな事柄」、「変化」、「循環」が重要であると考えていたことがわかった。

### 4. 「都市の多様性」についての両者の比較

ロバート・ヴェンチャーリは、都市の多様性について「多様性と対立性を備えた」要素を持つ「曖昧さ」によって「連想作用」が引き起こされ、都市が魅力的なものになると考えた。

彼は、互いに対立するものを内に含んだ様々な要素を一貫して「多様性と対立性」という言葉で表現していることから、「多様性と対立性を備えた要素」は「内に対立性を含んだたくさんの要素」と言い換えられる。そしてこれはさらに「内に差・相違が存

在するたくさんの要素」と言い換えられる。

ジェイン・ジェイコブズは都市について「たくさんの量、要素がある」ことは絶対的な必要条件で、そのたくさんある要素同士に「差」、「相違」が存在することによって都市における「変化」、「循環」、「連想作用」が引き起こされ、その「変化」、「循環」、「連想作用」のために都市は面白いものになると考えたことがわかった。

以上より、都市を多様性を持った魅力的なものにするために、両者が共通して述べているのは、

- ①「たくさんの要素」が存在すること。
- ②それぞれの要素のあいだに「差・相違」が存在すること。
- ③その差・相違によって「連想作用」が引き起こされること。

である。以上より、都市についての両者の考えで共通していることは、【「たくさんの要素」が存在し、その要素同士に「差・相違」が存在することで「連想作用」が引き起こされ、都市は魅力的なものになる。】ということである。それが両者共通の「都市の多様性」の概念であり、現在曖昧になっている「都市の多様性」の多様な意味のうち最も重要な意味であるといえる。

### 5. 結論

ロバート・ヴェンチャーリとジェイン・ジェイコブズの生涯を見ることで、通年的な視点で両者を捉えることができた。そして、それぞれが重要であると考えた「都市の多様性」の概念と、その共通部分が明らかになった。それにより、現在曖昧である「都市の多様性」の最も重要な部分を明らかにすることができたといえる。

#### 【参考文献】

- 『マトリクスで読む 20 世紀の空間デザイン』矢代眞己他著、彰国社、2003
- 『コラージュ・シティ』C.ロウ、F.コッター著、渡辺真理訳、鹿島出版会、2009
- 『都市デザインの系譜』相田武文、土屋和男著、鹿島出版会、1996
- 『Complexity and Contradiction in Architecture』R.ヴェンチャーリ著、The Museum of Modern Art 社、1966
- 『建築の多様性と対立性』R.ヴェンチャーリ著、伊藤公文訳、鹿島出版会、1983
- 『建築の複合と対立』R.ヴェンチャーリ著、松下一之訳、美術出版社、1969
- 『ラスベガス』R.ヴェンチャーリ他著、石井和紘、伊藤公文訳、鹿島出版会、1978
- 『Learning from Las Vegas』R. Venturi, D. Scott Brown, S. Izenour, The MIT Press 1972
- 『Out of ordinary : Rober Venturi, Denise Scott Brown and associates : architecture, urbanism, design』David B. Brownlee, David G. De Long, and Kathryn B. Hiesinger 著、PHILADELPHIA MUSEUM OF ART IN ASSOCIATION WITH YALE UNIVERSITY PRESS 2001
- 「ロバート・ヴェンチャーリとデニス・スコット・ブラウンから学ぶもの」Venturi and Scott Brown : what turns them on」雑誌『a+u : 建築と都市』2009 年 6 月別冊
- 「R.ヴェンチャーリ+D.スコット・ブラウン : 90 年代の作品」雑誌『スペースデザイン』1997 年 8 月
- 「Downtown Is for People」(雑誌『Fortune』1958 年 4 月)
- 『爆発するメトロポリス』W・H・ホワイト、J.ジェイコブズ他著、小島将志訳、鹿島研究所出版会、1973
- 『THE DEATH AND LIFE OF GREAT AMERICAN CITIES』J.ジェイコブズ著、ランダムハウス社、1961
- 『アメリカ大都市の死と生』J.ジェイコブズ 著、山形浩生訳、鹿島出版会 2010
- 『THE QUESTION OF SEPARATISM: Quebec and the Struggle over Sovereignty』J.ジェイコブズ著、ニューヨーク : ランダムハウス社、1981
- 『常識の天才ジェイン・ジェイコブズ』G.ラング・M.ウンシュ著、玉川英則・玉川良重訳、鹿島出版会 2012
- 「特集 J.ジェイコブズの都市思想と仕事」雑誌『地域開発』2006 年 8 月

## 討議

### 討議 [ 嘉名先生 ]

二つききたいことがあります。

日本語では多様性という言葉を使っているが、英語では二つのワードを使っていますよね。この理由を教えてください。つまり、多様性という言葉はどこではどういうふうに定義しているか明確にしたいと思います。

二点目としては、ジェイン・ジェイコブズについては計画者ではなく、アンチ計画論者として対抗案を出し、自分の考えをまとめてきたところがあると思うのですが、ヴェンチャーリは設計する人で建築をみていたと思うのです。このスタンスが違う二人を共通化する意味、多様性の共通性を見る意味の解説をお願いします。

### 回答

まず、一つ目の質問についてですが、ヴェンチャーリは多様性という言葉について、“complexity”という言葉を使って、建築や都市のなかに含まれる相矛盾する要素があることによってそれが複雑になって多様性が生まれるということを説明しています。一方、ジェイコブズは多様性と言う言葉自体はdiversityを使っているがこの言葉の前後でその多様な要素が複雑に絡み合うことで都市が魅力的になるということを述べています。“complexity”と“diversity”で言葉は違うが概念は共通しておりそれをここでは「都市の多様性」という言葉で説明しています。

二つ目の質問についてですが、現在まちづくりや都市計画の分野で「多様性」、「都市の多様性」というのは非常に良いもので、それさえあれば都市は魅力的になる素晴らしいもののように書かれているが、それが何か、ということを経験の分野で非常に重要な概念を示したヴェンチャーリと、都市の分野で非常に重要な概念を示したジェイコブズを並べ、全然違う立場であるからその共通部分が重要になるのではないかと考えています。

### 討議 [ 嘉名先生 ]

多様性の研究のわりには結論がかなり単純で戸惑ってしまいます。これを計画や設計にどう反映できるか、これは何がしたかったのか教えてください。

### 回答

まちづくりや都市計画の分野で多様性と言う言葉が安易に使われすぎていることに疑問を持って多様性と言う言葉だけでまちは魅力的にはならないとい

う考えのもとで考察した結果この結論になりました。

### 討議 [ 宮本先生 ]

一言だけいいですか。だからヴェンチャーリは失敗したんですよ。多様性というのは作る方法足りえない。心にしまっておくものであって設計の具体的な方法ではない。

### 討議 [ 横山先生 ]

ちょっといいですか。結論の問題ですけどね、僕も多様性という言葉をやたら使っている側ですけど、安易に使うとこういう結論になると思います。

色んなものがあって、その色んな物に違いがあって、そこに連想させるというまさにあなたの結論としていっているのは今世の中に一般的に広がっている多様性の意味で、この研究は全く新しいパラダイムを開いていない。ここで言っているのは多様性の一番ティピカルな意味です。そうだとするとこの研究したことに何の意味があったのですか。

### 回答

建築家が多様性をつくらうと思って設計するのはまちがっていて、連想作用を生むような設計をすることが重要で、多様性という言葉をもってきてそれを作ろうとすることには意味はない、ということがわかりました。

### 討議 [ 倉方先生 ]

副査ですが、連想作用に重きをおいたことは一般的に言われている概念をひっくり返したとは思わないのですが、これが創造の概念足りえないとしたらこの結論は何の役に立つのか、もしくは今後の研究の方向の可能性を教えてください。

### 回答

連想作用を生み出すことに対する研究ですかね。

### 討議 [ 三谷先生 ]

ジェイコブズは都市に色んな人がいる中で制度として多様性をどこまで容認するかということ論じ、ヴェンチャーリに関しては個人がそれをどこまで容認するかということについての話で、その二つにはちょっと違いがあるのではないかと感じました。

## 討議

### 討議 [ 嘉名先生 ]

二つききたいことがあります。

日本語では多様性という言葉を使っているが、英語では二つのワードを使っていますよね。この理由を教えてください。つまり、多様性という言葉をここではどういうふうに定義しているか明確にしたいと思います。

二点目としては、ジェイン・ジェイコブズについては計画者ではなく、アンチ計画論者として対抗案を出し、自分の考えをまとめてきたところがあると思うのですが、ヴェンチャーリは設計する人で建築をみていたと思うのです。このスタンスが違う二人を共通化する意味、多様性の共通性を見る意味の解説をお願いします。

### 回答

まず、一つ目の質問についてですが、ヴェンチャーリは多様性という言葉について、“complexity”という言葉を使って、建築や都市のなかに含まれる相矛盾する要素があることによってそれが複雑になって多様性が生まれるということを説明しています。一方、ジェイコブズは多様性と言う言葉自体はdiversityを使っているがこの言葉の前後でその多様な要素が複雑に絡み合うことで都市が魅力的になるということを述べています。“complexity”と“diversity”で言葉は違うが概念は共通しておりそれをここでは「都市の多様性」という言葉で説明しています。

二つ目の質問についてですが、現在まちづくりや都市計画の分野で「多様性」、「都市の多様性」というのは非常に良いもので、それさえあれば都市は魅力的になる素晴らしいもののように書かれているが、それが何か、ということを経験の分野で非常に重要な概念を示したヴェンチャーリと、都市の分野で非常に重要な概念を示したジェイコブズを並べ、全然違う立場であるからこの共通部分が重要になるのではないかと考えています。

### 討議 [ 嘉名先生 ]

多様性の研究のわりには結論がかなり単純で戸惑ってしまいます。これを計画や設計にどう反映できるか、これは何がしたかったのか教えてください。

### 回答

まちづくりや都市計画の分野で多様性と言う言葉が安易に使われすぎていることに疑問を持って多様性と言う言葉だけでまちは魅力的にはならないとい

う考えのもとで考察した結果この結論になりました。

### 討議 [ 宮本先生 ]

一言だけいいですか。だからヴェンチャーリは失敗したんですよ。多様性というのは作る方法足りない。心にしまっておくものであって設計の具体的な方法ではない。

### 討議 [ 横山先生 ]

ちょっといいですか。結論の問題ですけどね、僕も多様性という言葉をやたら使っている側ですけど、安易に使うとこういう結論になると思います。

色んなものがあって、その色んな物に違いがあって、そこに連想させるというまさにあなたの結論として今世の中に一般的に広がっている多様性の意味で、この研究は全く新しいパラダイムを開いていない。ここで言っているのは多様性の一番ティピカルな意味です。そうだとするとこの研究したことに何の意味があったのですか。

### 回答

建築家が多様性をつくらうと思って設計するのはまちがっていて、連想作用を生むような設計をすることが重要で、多様性という言葉をもってきてそれを作ろうとすることには意味はない、ということがわかりました。

### 討議 [ 倉方先生 ]

副査ですが、連想作用に重きをおいたことは一般的に言われている概念をひっくり返したとは思わないのですが、これが創造の概念足りないとしたらこの結論は何の役に立つのか、もしくは今後の研究の方向の可能性を教えてください。

### 回答

連想作用を生み出すことに対する研究ですかね。

### 討議 [ 三谷先生 ]

ジェイコブズは都市に色んな人がいる中で制度として多様性をどこまで容認するかということ論じ、ヴェンチャーリに関しては個人がそれをどこまで容認するかということについての話で、その二つにはちょっと違いがあるのではないかと感じました。